

平成 22 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730419

研究課題名（和文） 縦断的調査による児童期中・後期における自己概念の発達

研究課題名（英文） The development of Self-Concept in middle and late childhood: A longitudinal study

研究代表者

佐久間 路子（SAKUMA MICHIKO）

白梅学園大学・子ども学部・准教授

研究者番号：30389853

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童期中・後期の自己概念の発達を縦断的調査によって明らかにすることを目的に、小学校 4～6 年生を対象に質問紙調査を行った。その結果、4～6 年生の間に、自己の捉え方が否定的になり、コンピテンスが低下することが、部分的に明らかになった。また 6 年生になると自己の肯定的・否定的側面への気づきが高まることが明らかになった。この結果を生かして、高学年における自己理解を深める授業実践について考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to examine the development of the self-concepts in middle and late childhood through a three-year longitudinal questionnaire investigation. First, it was partially clarified that students through the 4th-grade to 6th-grade evaluate themselves negatively and have less self-competence. Second, the results indicated that 6th graders notice both positive and negative sides of the self. The implications of these results for providing help for the future self-understanding education in elementary school were discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：自己概念、児童、縦断研究、自己肯定感、質問紙調査

## 1. 研究開始当初の背景

幼児期以降の自己概念の発達については、Damon & Hart (1988) や Harter (1999) による発達モデルが示されており、また佐久間 (2006)

は、幼児期・児童期を対象にしたインタビューおよび青年期を対象とした質問紙調査によって、幼児期から青年期にかけての自己概念の発達モデルを実証的に示している。さら

に佐久間は、幼児と小学生を対象に、成長や変化という点に着目したインタビュー調査を縦断的に行い、小学校への移行期における自己概念の発達を検討しており（2005～2006年度科学研究費補助金若手研究（B）17730393）、幼児期から児童期前期における自己発達に関しては、研究の蓄積が進んでいる。

一方児童期中・後期の自己発達に関しては、実証的な検討はいまだあまり多くはない。しかしこの時期は自己発達において平穏な時期ではなく、認知能力の発達に伴い、自己概念に大きな変化が生じる。第一に、全般的な自己肯定感(global self worth)についての表象を形成することができるようになる(Harter, 1990)。第二に、自己概念の肯定的属性と否定的属性の両面を同時にもつことができるようになる(佐久間ら, 2000)。第三に、自己評価のために社会的比較を用いることができるようになり(Frey & Ruble, 1985)、他者との比較を通じて、肯定・否定の両方を含むより現実的で正確な自己認識をするようになる。さらに視点取得能力の発達によって(Selman, 1980)、他者が自分に対してもつ意見が、全般的な自己表象や領域固有の自己表象として内化されるようになる。また社会的な規範や基準も取り入れることができるようになるために、「好き-嫌い」という個人的な基準と、「いい-悪い」という社会規範を反映した評価基準が分化していく(佐久間ら, 2000; 佐久間, 2005)。

このように児童期には自己概念の発達において大きな変化が生じるが、この変化は必ずしも良い面だけではない。社会的比較ができるようになることは、自己評価が現実に即した正確さを持つことを意味し、比較によって自分のよさやできることが認められれば、自己効力感や有能感を維持したり、高めたりすることができる。しかし比較によって「～さんよりも下手、うまくできない」といった自分の否定的側面を認めることになると、自分の否定的な部分を意識することにつながり、自己効力感や有能感を低下させる原因となってしまう。実際に小学校高学年になるにつれて全体的な自己評価が低下することが示されている(桜井, 1983; 1999)。以上の研究の知見をまとめると、児童期中・後期の自己概念や自己評価の発達においては、「否定的な自己評価への気づき」が最重要課題といえるだろう。

しかし学校教育においては、自己概念や自己評価の発達に関するこれまでの知見が、十分に取り入れられ、活かされているとは言いがたい。学習指導要領には、第5、6学年の道徳においては「(6)自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。」という部分に自己概念に関する記載が見られる

が、悪い所は改めるべきものという趣旨であり、「否定的な自己評価への気づき」が生じたときにどのように対処すべきかという点は考慮されていない。教育心理学や発達心理学における知見を、学校教育に活かすためには、児童期の自己発達における課題を明確にし、その発達過程をより現実に即した形で描き出すことが必要と考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

- (1) 児童期中・後期の自己概念の発達を縦断的調査(質問紙調査、インタビュー調査)によって明らかにする。
- (2) 学校現場における児童期中・後期の自己発達における課題を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 質問紙調査

#### 対象者

第1回調査：A小学校4年生47名、5年生69名、6年生49名、計165名。B小学校4年生105名。合計270名。

第2回調査：A小学校4年生41名、5年生47名、6年生64名、計152名、およびB小学校4年生108名、5年生86名、計194名、合計346名。

第3回調査：A小学校4年生68名、5年生44名、6年生49名、計161名、およびB小学校4年生116名、5年生104名、6年生96名、計316名。合計477名。

調査方法：担任教諭を通じてアンケートを配布し、回答してもらった。縦断調査のために学年、クラス、出席番号を記入してもらった。回答後は、各自封筒に入れてもらい、回収した。第1回調査は2008年3月、第2回調査は2009年1月、第3回調査は2009年2月に実施した。

質問項目：①自分のことが好きか(「好き」・「どちらかといえば好き」・「どちらかといえばきらい」・「きらい」の4段階から1つ選択)、②好きなところはあるかないか(ある場合は具体的な内容を記入)、③嫌いなところはあるかないか(ある場合は具体的な内容を記入)、④1年前とくらべて自分は変わったと思うか・1年後の自分は変わると思うか、⑤児童用コンピテンス測定尺度(桜井, 1999)：9項目4段階評価。

### (2) インタビュー調査

研究代表者は、2005年度に年長児～2年生の子どもたちを対象に調査を始め、縦断的に調査を行ってきた。本報告では、2007～2009年度に4～6年生だった児童を対象とした調査の結果を報告する。

## 対象者

2007年度4年生、2008年度5年生、2009年度6年生の28名。

**調査方法：**2007～2009年の毎年8月に、学校の空き教室において、子どもに対して面接者と1対1で約10分間のインタビューを行った。面接は同時並行的に複数の面接者（筆者および大学院生など5～8名）で行った。面接内容は録音をし、それをもとに逐語記録を作成した。

**質問項目：**①現在の自分について（好きなどころ、いいところ、なりたい自分）、②1学年前の自分について（どんな子だったか、1学年前とどんなところが変わったか）、③1学年後の自分について（どんな子になっているか、今とどんなところが変わっているか、早く次の学年になりたいか）。

## 4. 研究成果

### (1) 質問紙調査

#### ①横断的比較結果

1) 自分のことがどの程度好きか (Table 1) : 「きらい」を1点、「すき」を4点というように1～4点に得点化し、学年による一元配置分散分析を行ったところ、第1回と第2回調査で、学年による主効果が明らかになった。多重比較の結果、第1回調査ではすべての学年差が有意であり、第2回調査ではA小学校では4、5年生よりも6年生の方が、B小学校では4年生より5年生の方が有意に低かった。以上より、学年が高いほど好きな程度が低く、自分を否定的に捉えていることが明らかになった。ただし第3回では有意な差が見られなかった。

Table 1 すき得点の平均値

学校	調査回数	4年生	5年生	6年生	F値
A	第1回	3.13	2.77	2.09	23.93 ***
	第2回	3.10	2.98	2.55	8.23 ***
	第3回	2.92	2.78	2.96	0.75
B	第1回	3.19	-	-	-
	第2回	3.19	2.92	-	5.86 *
	第3回	3.03	2.93	2.90	0.75

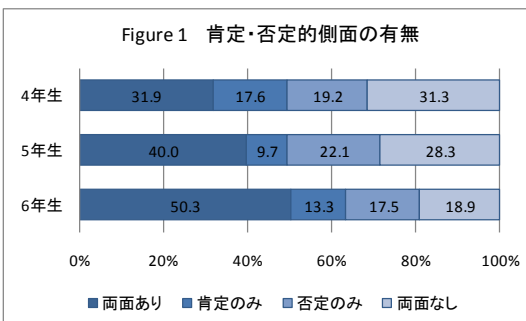
#### 2) 児童用コンピテンス測定尺度 (Table 2) :

9項目の合計点を算出し、学年による一元配置分散分析を行ったところ、第1回調査のみで学年による主効果が明らかになった。多重比較の結果、6年生と4、5年生に有意な差が認められ、6年生のコンピテンスが低いことが明らかになった。第2回、第3回では差が見られなかったが、その理由として第1回に比べて4年生の点数が低めであり、一方で6年生は高めであることがあげられる。第1回目のみしか差が明らかにならなかったことから、4～6年生では差があるとは明確には言い切れない。

Table 2 児童コンピテンス尺度得点の平均値

学校	調査回数	4年生	5年生	6年生	F値
A	第1回	24.64	22.70	19.49	9.37 ***
	第2回	21.97	23.86	21.81	2.32
	第3回	23.42	23.10	22.56	0.34
B	第1回	25.40	-	-	-
	第2回	24.52	23.57	-	1.30
	第3回	23.88	23.37	24.42	0.93

3) 肯定・否定的側面への気づき：最もデータ数の多い第3回調査データを分析対象として、好きなどころはあるかないか、嫌いなどころはあるかないかという質問に対して、「ある」あるいは「ない」と答えたかを分類して、学年によって偏りがあるかどうかカイ二乗検定を行ったところ、6年生が、肯定・否定の両面について「ある」という回答が多いこと（肯定：4年生49.2、5年生49.3、6年生63.6、否定：4年生51.4、5年生62.3、6年生68.3）が明らかになった（肯定： $\chi^2(2)=8.31, p<.05$ , 否定： $\chi^2(2)=10.14, p<.01$ ）。さらに「肯定・否定両面あり」「肯定のみ」「否定のみ」「両面なし」の4群に分類して、同様にカイ二乗分析を行ったところ、有意な偏りが明らかになった（ $\chi^2(6)=16.22, p<.05$ ）。結果を以下のFigure 1に示す。6年生で「両面あり」が多く、両面なしが少ないという結果であった。以上より、学年が上がると、肯定的側面と否定的側面の両面を捉えられるようになることが明らかになった。



#### ②縦断的比較結果

(本報告では、第1回と第2回調査で対応のあるデータのみ分析対象とする)

1) 第1回調査と第2回調査の「自分のことがどの程度好きか」の得点を比較し、1年後に「すき」方向に変化したか、変化しないか、「きらい」方向に変化したかで3群に分類した。4年生と5年生の比較、5年生と6年生の比較ともに変化なし群が多かったが（4～5年43.3%、5～6年52.5%）、きらい方向への変化も4～5年では40.3%、5～6年では35.0%と、すき方向への変化（4～5年16.4%、5～6年23.5%）よりも多かったことから、学年が上がると自己を否定的に捉えるようになる傾向が伺われた。

以上の質問紙調査の結果をまとめると、自分のことが好きな程度やコンピテンス尺度得点の分析結果から、高学年の方がより自己を否定的に捉えている傾向が見られたが、すべてのデータに共通する結果ではなかった。ただし学年があがるにつれて、自己の肯定的・否定的側面があると捉えることが明らかになり、自己の否定的側面への気づきが高まるといえるだろう。

## (2) インタビュー調査

### ① いいところについて

子どもの描出内容を Table 1 のように分類し、4年生から6年生の回答を比較した（以下では、対象人数が少ないため、統計的分析は行わないこととする）。

4年生では、具体的能力や勉強ができるなど、能力に関わる記述が多く見られたが、5年生ではあまり見られず、6年生ではやや増加した。5年生では、態度や性格に関する記述が多かった。また「わからない」という回答は5年生で少なく、「ない」という回答は、どの学年でも同程度見られた。

以上の結果は、クラス全体での変化であるが、縦断的な変化を明らかにするためには、個人ごとの分析が不可欠である。2年後には6年生のインタビューデータが60名程度集まるため、個人ごとの分析を進め、詳細な変化を明らかにしていきたい。

Table 3 いいところ

	4年生	%	5年生	%	6年生	%
具体的能力（絵がうまい、ボールが得意など）	5	16.7	2	6.9	6	20.0
勉強ができる・頭がいい（具体的な内容を含む）	5	16.7	2	6.9	2	6.7
勤勉的態度・性格（挨拶ができる、世話ができるなど）	5	16.7	6	20.7	3	10.0
協調的態度・性格（やさしい、友達と仲良くなど）	3	10.0	5	17.2	4	13.3
性格（明るい、素直、親用など）	0	0.0	6	20.7	2	6.7
その他具体的な行動	0	0.0	1	3.4	1	3.3
身体的特徴（手）	0	0.0	0	0.0	1	3.3
ない	5	16.7	5	17.2	4	13.3
わからない	7	23.3	2	6.9	7	23.3
合計	30		29		30	

### (3) まとめ

本研究の第一の目的は、児童期中・後期の自己概念の発達を縦断的調査（質問紙調査、インタビュー調査）によって明らかにすることである。3年間にわたる縦断的調査によって、4～6年生の間に、自己の捉え方が否定的になること、コンピテンスが低下することが、部分的に示された。しかし、学年が上がっても、自分を好きな程度が低下しない場合もあった。従って、4～6年生の間に自己の捉え方が否定的になるとは言い切れない可能性がある。その理由として、第2回目と第3回目の調査では、既に4年生の段階で自己を比較的否定的に捉え始めていたという可能性がある。自己効力感や有能感などの低下は、高学年の課題と考えられていたが、中学年の段階でそのはじまりが見られているのかもしれない。質問紙調査では、4年生以降を対象としたが、小学校低学年も含めること

で、否定的に捉え始めるようになる時期を明らかにする必要があるだろう。インタビュー調査は、肯定的側面に関する質問しか含まれないが、低学年から調査を行っているので、そのデータのさらなる分析を進めることによって、低学年からの発達的变化が明らかになるだろう。

第二の目的としてあげた学校現場における児童期中・後期の自己発達における課題を明らかにするについては、児童の調査だけでなく教員を対象とした調査を行う予定であったが、実施することができなかった。また授業実践を行うことも目標としていたが、実施できなかった。しかし児童を対象とした調査から、6年生になると自己の肯定的・否定的側面への気づきが高まることが明らかになった。この結果から、高学年では、自分のすきなところやよいところ、嫌いなところや悪いところをじっくりと考え、向き合うことを通して、自己の理解を深めることができると考えられる。その際、自分のこれまでの発達を振り返り、成長や変化に気づくことや、単に悪いところを改めるだけではなく、なぜ自分がそのときに否定的な側面として取り上げたのかを考えさせるなどといったことが、さらに自己への理解を深めることにつながると考えられる。今後は、この成果を生かして、小学生を対象とした授業実践を行っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 佐久間路子（以下略）、小平市における保幼小連携の課題を探る：小学校1年生担任教諭対象の調査から、白梅学園大学・短期大学教育研究センター年報、査読有、No. 13、2008、61～65

〔学会発表〕（計4件）

- ① 佐久間路子、縦断的調査による児童期中・後期における自己概念の発達—自己肯定感の変化を中心に—、日本発達心理学会第21回大会、2010年3月27日、神戸国際会議場（兵庫県）
- ② 平井美佳子、佐久間路子（以下略）、子どもにおける自己と他者—言語報告による検討—、日本心理学会第72回大会、2008年9月19日、北海道大学
- ③ 佐久間路子、児童期における自己の成長に関する認識～縦断的インタビュー調査による検討～、日本発達心理学会第19回大会、2008年3月21日、大阪国際会議場

- ④ 久保ゆかり、佐久間路子 (以下略)、関係性のなかの発達を捉える:「長い目」と「広い目」、日本心理学会第 71 回大会、2007 年 9 月 19 日、東洋大学

〔図書〕 (計 2 件)

- ① 無藤隆、佐久間路子他、学文社、心理学のポイント・シリーズ 発達心理学、2008、22～23, 36～39, 50～51, 67～69, 78～81  
② 内田伸子、佐久間路子他、ミネルヴァ書房、よくわかる乳幼児心理学、2008、126-127, 136-139

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐久間 路子 (SAKUMA MICHIKO)  
白梅学園大学・子ども学部・准教授  
研究者番号：3 0 3 8 9 8 5 3